

〔研究ノート〕

ヨシフ・レヴィツキー著『ハリチナーにおけるルテニア語または小ロシア語の文法書』(1834)におけるウクライナ語の主体性について¹

ダツェンコ・イーホル

1. 序論

ヨーロッパにおけるロマン主義の時代はヨーロッパ諸民族の民俗学への関心をもたらしただけでなく、あまり知られていない民俗の言語を学術的に研究するきっかけにもなった。19世紀初頭にはスラブ民族の民族的覚醒が起り、チェコ語、セルビア語、スロベニア語、スロバキア語などのスラブ諸語の規範体系が整備された²。スラヴ民族の復興は、ロシア語とベラルーシ語を除くほとんどのスラヴ民族が18世紀末にハプスブルク帝国の支配下にあったことも後押しした。ヨゼフ・ドブロフスキー (Josef Dobrovský)、ヴーク・カラジッチ (Vuk Karadžić)、イェルネイ・コピタル (Jernej Kopitar)、パヴェル・シャファーリク (Pavel Šafárik) など、18世紀末から19世紀初頭にかけてスラヴ諸語の著名な研究者たちが活躍したのも、このオーストリア国家であった。

近代ウクライナ語の形成の始まりについて言えば、2つの要素を考慮しなければならない。第一に、18世紀末から19世紀初頭にかけて、ウクライナ語はすでに独自の歴史的伝統を持っていた。長い間、ポーランドのカトリシズムの文化的影響を受けてきたウクライナ語には、2つの機能的な

言語標準が発達していた。典礼用のウクライナ語版教会スラヴ語（ポーランドにおけるラテン語に相当）と、その他のニーズ（ポーランドにおける口語的文体のポーランド語に相当）用の *prosta mova*（簡単な言語）である³。第二に、ウクライナ人はハプスブルク帝国とロシア帝国の間で分断された異なる社会的・政治的条件の中で生活していたため、ウクライナ人の文化的発展はロシア帝国の文化的発展と絡み合うことなく異なる道をたどった。

ロシア領ウクライナでは、1775年にザポロージャのシーチを清算した後、ウクライナ人とロシア人を同化させようとする試みが行われた。その同化は、言語の類型的類似性と正教会の信仰の共通性によって促進された（Масенко 2005: 5）。しかし、そのような状況下でも、ロシア領ウクライナでは18世紀末から民俗ベースのウクライナ文学とウクライナ演劇が急速に発展した。ロシア初のウクライナ劇場は1817年にポルタヴァに設立されたが、一方、オーストリアにおけるウクライナ劇所が設立されたのは1864年になった（Витвицький 1976: 3146）。当時のウクライナ文学を代表する著名な人物は、ドニプロ地方のイヴァン・コトリャレヴシキー（Іван Котляревський）やペトロ・フラーク＝アルテムフシキー（Петро Гулак-Артемівський）、スロボジャンシチナ地方のフリホリイ・クヴィトカ＝オスノヴィヤネンコ（Григорій Квітка-Основ'яненко）などである。1818年には、サンクトペテルブルクでオレクシイ・パヴロヴシキー（Олексій Павловський）著『小ロシア語文法書』というウクライナ語の最初の文法書が出版された（Павловський 1818）。

長い間ポーランド・リトアニア共和国の支配下にあったウクライナ人は、貴族や教養階級のレベルでポーランド人と同化し、19世紀初頭には「ポーランド民族のルテニア人」（*gente Rutheni, natione Poloni*）という概念が形成された（Danylenko 2021）。しかし、そのような不確定なウクライナ民族のアイデンティティへのアプローチをもってしても、そのアイ

デンティティの形成は18世紀後半にオーストリア政府がハリチナー地方における東方典礼式カトリック教会に属する住民の教育的・社会的状況を改善するために導入した施策によって促進された。学校におけるウクライナ語の導入や、ハプスブルク帝国における他のスラヴ諸語の科学的研究によって、ハリチナー系ウクライナ人は古代ウクライナ文学の長い伝統と当時の方言の現状を頼りに、ウクライナ語を標準化する方法を模索するようになった。19世紀前半、文化的中心地となったプシェシル市とリヴィウ市において東方典礼式カトリック教会で使用されていた教会スラヴ語の教科書や入門書を出版するとともに、ウクライナ語の規範を発展させるための学術的な根拠を示したウクライナ言語学に関する研究論文が何冊かできてきた。イヴァン・モヒリヌィツキー(Іван Могильницький)、ヨシフ・レヴィツキー(Йосиф Левицький, 1801 – 1860)は、伝統的に19世紀前半のハリチナーにおけるウクライナ言語学の最も著名な代表者とみなされている。

2. オーストリア帝国初の本格的なウクライナ語の言語学的研究書

2.1. Y.レヴィツキーの文法書執筆の前提条件としてのI.モヒリヌィツキーの言語学著作

I.モヒリヌィツキーは、おそらく、ウクライナ語研究に学術的アプローチを最初に提唱した人物である。東方典礼式カトリック教会の司祭で、教会スラヴ語の初頭読本を何冊か出版し⁴、ウクライナ語の文法書も1823年に執筆した。「ルーシ語」と称えたウクライナ語の個別性、とりわけポーランド語との関係における個別性を擁護した(Moser 2016: 173)。しかし、彼の文法書は出版されることなく、写本の形で残された。"Rozprawa o języku ruskim"の抜粋の一部のみが1829年にポーランド語の地方雑誌『オソリンスキー公共図書館の科学雑誌』に掲載され、その紹介が別のパ

ンフレットとして出版された (Mogilnicki 1837)。

ハリチナーにおける最初の本格的なウクライナ語文法書は、東方典礼式カトリック司祭 Y. レヴィツキーが 1834 年にプシェミシル市で出版した『ハリチナーにおけるルテニア語または小ロシア語の文法書』("Grammatik der Ruthenischen oder Klein-russischen Sprache in Galizien") である (Lewicki 1834)。この文法書は、ハリチナーにおけるウクライナ人の文化生活の復興に尽力したことで知られる司教イヴァン・スニフルシキー (Іван Снігурський) が東方典礼式カトリック教会のプシェミシル教区の司教であったときに、プシェミシル教区の印刷所で出版された (Moser 2016: 221)。I. モヒリヌィツキーの長所は、西部ウクライナにおける教会スラヴ語の長年の伝統に基づいて土語の特徴である新しい要素を導入したことである。そして、教会スラヴ語に関する保守的なアプローチと西部ウクライナ語に関する革新的なアプローチを組み合わせたまさにそのような言語概念は、Y. レヴィツキーによって借用された。

2. 2. ウクライナ語の概念に関するレヴィツキーの見解

まず、『ハリチナーにおけるルテニア語または小ロシア語の文法書』序文では、Y. レヴィツキーがウクライナ語に関する一般的な情報を提供し、文学におけるウクライナ語の使用例を挙げている。1794 年にポチャイフ・ラヴラで出版された後期の *prosta mova* の手本であるユリアン・ドブリロフシキー (Юліан Добриловський) 著の説教集『日曜と祭日の説教』(Добриловський [1792]) を、ルーシ語の最も純粋な手本 (am reinsten russinisch) と Y. レヴィツキーは考えている。

1798 年、I. コトリャレヴシキー著バーレスク詩『エネイダ』がサンクトペテルブルクで出版され、土語に基づく近代ウクライナ語の最初の例となった。Y. レヴィツキーも 1808 年版の『エネイダ』をウクライナ語の手本として挙げているが、その著作の言語を完璧な手本とは考えてい

なかった⁵。土語のみに基づいてウクライナ語の標準を形成することは、1517年のフランシス・スコリナ(Францыск Скарына)の聖書翻訳や、1588年のリトアニア憲章にまで遡るルーシ語の歴史的伝統を含めなければならぬ。Y. レヴィツキーの概念の枠組みには当てはまらなかった。同時に、Y. レヴィツキーは『ハリチナーにおけるルテニア語または小ロシア語の文法書』の中で、12世紀から19世紀までのウクライナ文学史の書誌8ページ(P. XI—XVIII)のうち、5ページ(P. XIII—XVII)が *prosta mova* で書いた文献のリストに割かれている。*Prosta mova* の著作は、確かに古代ウクライナ語発展の16-17世紀の黄金時代に書かれたものだが、19世紀初頭にはすでに内容的にも言語的にも時代遅れになっていた。

Y. レヴィツキーが記述した言語の名称およびこの言語を使う民族の名称については、彼の文法書の中には現在の名称「ウクライナ語」または「ウクライナ人」が用いられていない。民族の自称は“русинь”「ルーシ人」、「народъ рускій」「ルーシの民族」であると記されている。この民族の歴史は、ルテニア教会の聖人であるヴォロディミル大王の公国にまで遡る。地理的な分布について、Y. レヴィツキーはハリチナーの行政区域に関する詳細な統計を示し、ロシアのルーシ人はポドリア、ヴォルィーニ、キーウ、そして「ウクライナ」に住み、合計で約800万人にのぼると指摘している⁶。おそらく「ウクライナ」という名称は、ドニプロ地方とハリチナーとの民族的つながりを指して、ハリチナー地方でY. レヴィツキーによって初めて用いられたものであろう。

言語名称については、Y. レヴィツキーは *russinisch* および *ruthenisch* の2つの用語を用いており、前者をかなり好んでいる。おそらくY. レヴィツキーは、*russinisch* という名称を適切な自称であると考えて好んだのだろうが、ドイツ語圏の首相官邸で広く使われていた *ruthenisch* という用語も認めている。Y. レヴィツキー文法書の本文中には何度か、そして最も重要なことだが、そのタイトルにも *kleinrussisch* という形容詞

が使われている。おそらく、その形容詞の使用は O. パヴロヴシキーの "Грамматика Малоросійскаго Нарѣчія" (『小ロシア語文法書』) の影響で説明できるだろう⁷。一方、Y. レヴィツキーが kleinrussisch という単語を使ったのはドニプロ地方のウクライナ語を指すためと思われ、文法書のタイトルにこの単語があることでハプスブルク帝国とロシア帝国 2 つの帝国内でのウクライナ語の同一性が強調されている。小ロシアという用語は、19 世紀前半のハリチナーで出版された他の文法書でも使用されていた (Wagilewicz 1845; Łoziński 1846)。

Y. レヴィツキーは「言語」という概念そのものについて明確な見解を持っていたわけではない。Y. レヴィツキーはドイツ語の Sprache、Dialekt、Mundart、Volkssprache、Umgangssprache という用語を使っていたが、その中でも Dialekt が最も頻繁に使われている。このような用語の不明確さは、スラヴ学の黎明期にはスラヴ諸語として分類された言語はわずかであり、それらは東スラヴ語と西スラヴ語に分けられていたという事実から説明することができる (Moser 2016: 183)。そのため、J. ドブロフスキーはウクライナ語にはまったく触れず、ロシア語とみなしているようだ (Kopitar, Wilhelm 1808: XIX)。もちろん、19 世紀初頭にはスラヴ諸語の言語と方言を区別する基準は存在しなかった。言語というのは一定の標準語であり、方言というのはより狭義の言語の変種であるという意識はあった。その一方で、ロシア語とは別にウクライナ語の話し言葉や書き言葉の歴史的連続性を示したいという Y. レヴィツキーの願望や、スラヴ諸語の中でウクライナ語は別格であるという主張も見取れる。例えば、『ハリチナーにおけるルテニア語または小ロシア語の文法書』の付録で Y. レヴィツキーは、13 世紀から 19 世紀までの文章のサンプルを紹介しているが、これらの文章は、トランスカルパチア地方、ハリチナー地方、ドニプロー川地方からのウクライナ語の文章など、地理的な観点から選ばれている。ただし、ロシア語やベラルーシ語の文章はない。だからこそ、

彼の文法書のタイトルには、読者にはルテニア又は小ロシア方言ではなく言語の文法書が提示されているのだ、と考えられるだろう。

2.3. 「幅広い意味のロシア民族語」およびその特徴

18世紀後半にJ. ドブロフスキーのによって提唱されたスラヴ諸語の2成分分類(Дуличенко 2014: 288-289)に従って、Y. レヴィツキーはウクライナ語を東スラヴ共通の言語群としてロシア語に含めた。彼はこの「広義の言語」を「全体的なロシア語」“die russische Volkssprache im Allgemeinen”あるいは「幅広い意味のロシア民語」“die russische Volkssprache im weiteren Sinne”という名称を付けている。ウクライナ語のほか、現代的な意味でのロシア語(「上部ロシア語」“hochrussische Sprache”、「モスクワ方言」“moskowischer Dialekt”、「ロシア語」“die russische Sprache”)およびベラルーシ語(「ミンスク方言」“minskischer Dialekt”)もそのクラスターに含まれる。

Y. レヴィツキーは、「幅広い意味のロシア民族語」をスラヴ諸語と区別する特徴を挙げている。もっとも重要な特徴として、快音のo (das o euphonicum russicum) と快音のe (das e euphonicum russicum) と呼ぶ充音を挙げている。東スラヴ諸語をポーランド語や教会スラヴ語と区別するのは、*молоко*「牛乳」や*береза*「白樺の木」の発音である。レヴィツキーが挙げるrの純粋な発音やアクセントの自由な位置など、その他の特徴は他のスラヴ諸語にも当てはまる。

2.4. 「ルーシ方言」およびその特徴

しかし、Y. レヴィツキーの目的はウクライナ語を記述することであったから⁸、Y. レヴィツキーがウクライナ語本来の特徴をどのように考えていたかを調べることは重要である。ウクライナ語の音声学的・文法的特徴を論じる際、Y. レヴィツキーはウクライナ語とロシア語を区別する特徴

を挙げるが、ベラルーシ語については、おそらくベラルーシ語への親しみが浅いためか、省略している。また、Y. レヴィツキーは、ウクライナ語とロシア語のある現象の方言的变化を考慮しておらず、彼の出身地である南西ウクライナ方言と、19世紀初頭までにある程度発達したロシア語の文語的標準を重視している。

まず、多くの単音節の単語の単数主格形で、ドイツ語の ü のように o が発音される。例えば、сто́ль (stül, stüw), во́ль (wül, wüw) である。Y. レヴィツキーは、モスクワ方言とミンスク方言の特徴として、場合によっては o を a (アクセントが置かれない o) として発音することがあると付け加えている。例えば、chadzila、tabi、mai である。

閉音節において、語源的な o が i に変化し、一部の西ウクライナ方言 (Y. レヴィツキーが生まれた地方の方言) では ü に変化することは、ウクライナ語の特徴のひとつである。例えば、сти́л, ві́л がある。開音節では o が残る。例えば、сто́лу, во́ла である。そのため Y. レヴィツキーは、o が ü に変化したことを示すために、o の上に分音記号を付けることを提案した。

「o の上に記号を付けなければならないのは、その違いを示す適当な方法がないからである。O. パヴロヴスキーのように и (i) を書くと、この違いに気づかない人には理解しにくくなり、言語が非常に不規則になる。ко́нь (küń) das Pherd の他の語尾が küńia ではなく конà であることを誰が知ることができようか」(Lewicki 1834: 13)。

しかし、ウクライナ語の特徴には、開音節の o と閉音節の i の交替だけでなく、開音節の e と閉音節の i の交替でもある。例えば、міч – печі である。Y. レヴィツキーはそのような音声交替について指摘していない。

第二に、語源的な ъ の発音は「ドイツ語の die, wie, sie」であるのに対して、「ほとんどのスラヴ語、特にロシア語では、直前の軟子音とともに e として発音される：ウクライナ語 вѣкъ (wiek), ロシア語 wek, wiek;

ポーランド語 *wiek*; チェコ語 *wěk*; セルビア語 *вѣкъ*。他の音と音声交替しない「i」という語源的な *ь* の反射音は、ウクライナ語の特徴である。

第三に、動詞の不定形にはロシア語のように *ть* ではなく *ти* という接尾辞がつく：ロシア語 *писа́ть* (ポーランド語, *писаć*) に対する、ウクライナ語 *писа́ти* (*pysaty*) *schreiben*。実際、不定形の接尾辞 *-ти* は、ウクライナ語のほとんどの地域、特に Y. レヴィツキーの方言であった南西部の方言に広く見られる。しかし、ウクライナ語の南東方言と北方方言には、ロシア語やベラルーシ語と共通の接尾辞 *-ть* もあり(変化形 *-ць*)、これはウクライナ語の標準語でも通用する。

Y. レヴィツキーは、名詞の前置格形における子音 *г-з*, *к-ц*, *х-с* の音声交替を、第四の差別化特徴としている。一方、ロシア語ではそのような交替が起こらない。この交替は、他のスラヴ諸語の特徴でもあるが、スラヴ諸語の第二次口蓋化の影響を反映しているが、ロシア語では形態类推作用によって無力化された(Иванов 1979: 190-191)。

2.5. 「保守主義」と「革新主義」の間の Y. レヴィツキーの文法書

Y. レヴィツキーの言語学的見解に対する主な批判の一つは、彼の文法書に反映されているように、教会スラヴ語に関する保守主義であった。その保守主義は、主に教会スラヴ語の綴りを守ろうとしたことと、正書法に対する語源論的なアプローチに現れている。Y. レヴィツキーは教会スラヴ語のアルファベットをすべて使用した。彼は *s* (*сѣло*)、*e*、*ψ*、合字の使用を容認した。彼は *ь* の使用、*o* と *e* の上の分音記号 (*прише́ль*, *съ злодѣ́мь*) は語源的に正しく、*ou* の上の括弧 (*оумерь* “*wmer*”)、*ъ* を硬子音の後の語尾に *ь* の反対として使用することは音声学的に適切であると考えた。Y. レヴィツキーはまた、活用変化される動詞の語幹の交替を示すために合字 *жд* を使うことも提案している：*води́ти* – *во́жду*。しかし、Y. レヴィツキーは 17 世紀に *prosta mova* で出版された書籍に言及

し、これらの書籍で広く使用されていた *r* という文字の使用についてはむしろ不確かであるとしている。その代わり、Y. レヴィツキーは *r* 文字の二重発音に注目している：грѣхъ (*hriech*) に対する граматика (*grammatyka*)。

Y. レヴィツキーは生涯を通じて、ほぼ一貫してウクライナ語のスペリングに合わせた教会スラヴ語の綴りに従っていた。彼が体系化し保存しようとした保守的な規則は、「われわれルーシ人は、われわれの曾祖父たちが書いた方法で書き続けなければならない」という事実だけでなく、他の東スラヴ人にも理解できるようなウクライナ語の普遍的な綴りを開発しようとした彼の試みによっても説明される。例えば、1843年にワルシャワの雑誌“Денница – Jutrzenka”に掲載された論文『ハリチナー・ルーシ語の運命』“Доля галицко-русского языка”の中で、彼は次のように記した：「小ロシア語と北東ロシア語は、発音は違っても綴りは似ているべきだというのが私の立場である」(Мозер 2007: 448)。

上記の引用文は、Y. レヴィツキーが文法書で動詞の男性過去形の -лъ という接尾辞の綴りを根本的に擁護し、[в]と発音すべきだと強調した理由を説明している：писа^ль (*pisaw*), спа^ль (*sraw*)。その理由でいくつかの単語の頭に母音 *o* や *u* が書かれているのは、これらの単語の母音発音の始まりを示しているのではなく、むしろ原始子音なのである：окоは *woko*, оухоは *wucho* として読むべきだ。Y. レヴィツキーによると、後の柔子音の後の *а* あるいは語源的な柔子音の後の *a* は、ドイツ語の *ä* のように発音される：тел^а (*telä*), ша^апка (*szäpka*)。

Y. レヴィツキーは基本的に語源的な綴りを支持するのに反して、形態論においては一貫して保守的ではなかった。『ハリチナーにおけるルテニア語または小ロシア語の文法書』の革新的な特徴は、保守的な教会スラヴ語の形態語形と並んで、土語の形態語形が頻繁に見られるという事実に現れている。もちろん、ウクライナ語の文体を作ろうと、レヴィツキーは

教会スラヴ語の特徴である保守的な語形を用いた。例えば、двигающийся, бываю движимый のように、ウクライナ語には典型的でない形動詞の形を示したり、教会スラヴ語には典型的な、быти движиму のような第2与格の構文を示したりしている。形容詞の性形は、мудрая, мудрое のように、不短縮長語尾な語形で表わされている。教会スラヴ語と同じように複数も3つの性の語形に分けられる。例えば、мудрыи, мудрыя, мудрыа (主格形のみ)である。同時に、Y. レヴィツキー自身はこの原則を完全には守っていない。ウクライナ語の土語の形容詞の短縮形もあらわれる。例えば、чорна сорочка である。述語機能でのみ教会するヴ語の短語尾形の代わりに同音異義のウクライナ語の短縮形が用いられている。例えば、Она щастлива である。古代スラヴ語の名詞タイプの形容詞の由来する形容詞の短語尾形は、ウクライナ語には保存されていない。ウクライナ語の形容詞は、短縮語尾形として知られる音声プロセスを経ました。主格のみに述語機能および修飾機能としてあらわれる女性形 -ая、中性形 -ое、複数形 -ые はそれぞれ a, e, i に短縮された。主格以外の他の格には短縮がされなかった。Y. レヴィツキーは非論理的な観点からウクライナ語にない短語尾形の格変化の例を示しており、土語のウクライナ語の形容詞の格変化と混同しているようだ。たとえば、以下の表に示す混同がある。

表

男性形	レヴィツキー	教会するヴ語の短語尾形容詞 ⁹	標準ウクライナ語の形容詞
主格	голоде́нь	гладенѣ	ГОЛОДНИЙ
生格	голоднѧ́	гладна	ГОЛОДНОГО
与格	голоднѣ́	гладнѣ	ГОЛОДНОМУ
対格	голоде́нь	гладенѣ	ГОЛОДНИЙ
造格	голоднѣ́мъ	гладнѣмъ	ГОЛОДНИМ
前置格	голоднѣ́мъ	гладнѣ	ГОЛОДНОМУ / ГОЛОДНИ́М

そのような矛盾は、Y. レヴィツキーの『ハリチナーにおけるルテニア語または小ロシア語の文法書』には、ウクライナ語の南西方言に典型的な語形も多く見られるという事実から追跡でる。例えば、男性名詞の単数与格形の語尾 *ови* (*комарови*)、女性名詞単数造格形は語尾 *-ов, -ев* (*водо́въ, че́стевъ*) をつけることができ、代名詞の短縮形：*го, му*、所有代名詞 *мому* の使用が認められている。*бути* 動詞の旧形：*есмь, еси, есть, есмы, естè, суть* に加えてウクライナ語の南西方言における *емь, есь, е, смо, сте, суть* という語形も記された。また、サノク地区、ヤセル地区、ソンドツキー地区、ハンガリーのムカチェヴォ近郊のルシーン人は、複数形では *е* の代わりに *о* を使うことも指摘されている：*мысме* に対する *мысмо*、同じように *былиме* (*булиме*) *видѣлиме, ходи́лиме*。これらは南西方言のレムコ方言である。命令法では、助詞 *няй* (*няй буду, няй буде, няй будуть*) が使われる。助詞 *няй* には、*нехай, нех* という助詞によって交替される。Y. レヴィツキーは、教会スラヴ語で使われた旧形として、助詞 *да* を伴う形を示している：*да будеть*。Y. レヴィツキーは東方典礼式カトリックの司祭として教会スラヴ語の文法に精通し、17～18世紀の印刷物にも通じていた。明らかに、Y. レヴィツキーにとって、綴りの語源的原則を守ることが重要であり、保守的な文法現象は当時の読者には理解できない可能性があった。

2. 6. Y. レヴィツキーはどうしてウクライナの言語改革者にならなかった？

ウィーンのスラヴ学の学者 J. コピタルは、Y. レヴィツキーを正書法の問題で最も批判した。J. コピタルは、ハリチナー系ウクライナ人が民族単位で自分たちの言語の標準を開発しようとする試みを温かく歓迎した。ウィーンの検閲官として、ウクライナ語の著作に影響を与えた¹⁰。1831年、J. コピタルは Y. レヴィツキーのまだ発表されていない『ハリチナーにおけるルテニア語または小ロシア語の文法書』を検閲に付した。Y. レ

ヴィツキーの文法書に対する主な批判は、民間文法語形の導入とともに古書の伝統を復活させようとしたことであった。J. コピタルはそれを「二人の主人に仕えること」(Маковей 1903a: 22) と呼び、そのためどちらの主人、保守的な教会スラヴ語も、革新的なウクライナの土語も、そのような仕えには満足できなかった。「あなたたちには神聖な言語と民衆的な言語¹¹があります。その2つの言語はあなた方の不幸である」(Маковей 1903a: 22) とコピタルは記した。「真の文法家は発音通りに書くものだ」(Маковей 1903a: 22) と言いながら、J. コピタルは Y. レヴィツキーに綴りを土語の発音に近づけるための助言を与えた。例えば、пошёлъ の場合は ё の代わりに о を書くこと、у と ou の綴りを統一すること、оумерьъ のような単語を発音通りに書くこと、単語中で発音されない文字の綴りをなくすこと(где は де として書く、など)を勧めた。Y. レヴィツキーの文法書は3年後の1834年に出版されたが、Y. レヴィツキーが J. コピタルからの助言を活用しなかったことは注目に値する。土語は衰退し、ハリチナー人エリートはポーランド化され、土語の行く末を憂慮した Y. レヴィツキーは、ウクライナ語の歴史的発展と教会や世俗の文学におけるその深い伝統を証言するような『ハリチナーにおけるルテニア語または小ロシア語の文法書』という著作を提案したのである。しかし、Y. レヴィツキーの過ちは、教会スラヴ語をウクライナの土語に混合しようとしたことだった。

18世紀半ば、セルビアでは教会スラヴ語と土語の混合に基づく文語の開発が試みられた。マヌイル・コザチンスキー率いるロシア人学者の影響を受け、いわゆる「スラヴ・セルビア語」が開発された(Unbegaun 1935)。セルビア人は教会スラヴ語を基礎とし、その上に土語の要素を重ねたロシア文学言語を開発しようとするロシア人の試みに触発された。そのような「スラヴ・ロシア語」は、事実上18世紀いっぱいロシアに存在し、19世紀のプーシキンやその他の著名なロシアの作家によって完成されま

した。現代、その「スラヴ・ロシア語」は「ロシア語」として知られている (Picchio 1984: 16-22)。

しかしセルビアでは、「スラヴ・セルビア語」の開発事業が成功することとはなかった。ロマン主義時代の到来とともに、保守的なアプローチは失速していった。セルビアでは、伝統の言語に対する民衆の生きた言語の勝利はヴーク・カラジッチの改革によるものだった。それ以来、セルビア語の現代が始まった (Picchio 1984: 24)。

ヴーク・カラジッチによるセルビア語改革の成功例を目の当たりにし¹²、ウィーンの検閲官 J. コピタルはハリチナー系のウクライナ人たちにウクライナ文語の発展に2つのアプローチを結合させ、ウクライナ文語の発展を加速させるという過ちを犯さないように警告しようとした。J. コピタルは、ハリチナーの人物たちに言語の歴史観を否定し、当時の土語の現状に焦点を当て、すべての方言に共通する文語を開発するよう勧めようとした。歴史は J. コピタルの見解の先見性と正しさを示しており、Y. レヴィツキーが J. コピタルの助言を受け入れ、新しい綴り規則および土語に基づいた形態語形を提案していたら、ハリチナー地方におけるウクライナ語の発展の力と方向を変えていただろう。

3. 結論

Y. レヴィツキーの『ハリチナーにおけるルテニア語または小ロシア語の文法書』は、ウクライナ語の歴史において、ウクライナ語のさらなる発展に弾みをつけるような要因にはならなかった。ウクライナ語の新しい文語を開発し、それを記述するという野心的な意図を持っていた Y. レヴィツキーは、当時の雰囲気を感じ取ることができず、誤った方向に進んでしまったのである。Y. レヴィツキーはウクライナ語の発展の流れを教会スラヴ語の伝統に戻そうとしたが、彼が生きていたロマン派時代は民俗的な

モデルによって養われていた。

そのアプローチには欠陥があるものの、レヴィツキーの『ハリチナーにおけるルテニア語または小ロシア語の文法書』は、ウクライナ語の主体性を立証する最も初期の、そして学術的に最も客観的な試みのひとつである。Y. レヴィツキーは当時代のウクライナ語の状態について最も重要な記述のひとつを提供している。19世紀前半のスラヴ学の成果を踏まえ、彼はウクライナ語の主体性についての地位を擁護した。さらに、ウクライナ語を東スラヴ語群の一つとして適切に分類した。Y. レヴィツキーはウクライナ語の主体性の歴史的証拠を示しただけでなく、ウクライナ語のすべての方言に共通する特徴を説明した。同時にそれらの特徴がウクライナ語とロシア語をいかに区別するかを示した。

注

- 1 この論文の要旨は、2022年にSlavic Linguistics Societyによって札幌で開催された「SLS-17」学会で発表された。
- 2 現代スラヴ諸語の形成については、次のような教典に詳細に示されている：Picchio 1984; Бернштейн 1978 など。
- 3 B. ウスペンスキー (Успенский 1994: 70) の著書『ロシア文語史略説』の一章には、次のようなタイトルがある：『教会スラヴ語と「prosta mova」の共存の本質：ラテン語とポーランド語のバイリンガリズムの類似としてのルーシ南西部の教会スラヴ語とルーシ語のバイリンガリズム』。
- 4 19世紀前半のウクライナ言語学の研究者 M. ウォズニャック (Возняк 1909: 120) は、I. モヒリヌィツキーの次の教会スラヴ語の初頭読本を指摘している：Букварь славено-русского языка. Буди́н, 1816, 再出版：1817, 1819, 1826, 1827。
- 5 12世紀のキエフ・ルーシの文学作品『イーゴリ遠征物語』のウクライナ語への翻訳において、Y. レヴィツキーはコトリャレーウシキーの『エネイード』に見られる表現を用いている (Франко 1896: 9)。
- 6 ロシア帝国とオーストリア帝国の全ウクライナ人を詳細に集計した結果、レヴィツキーは次のような結論を導き出した：“Die russinische Sprache

- (Dialekt) wird also von mehr als 8 Millionen Menschen gesprochen, verdienete (sic!) daher einen angemessenen Platz in der Geschichte der slavischen Sprachen“ 「ルーシ語 (方言) は 800 万人以上が話しているので、スラブ言語の歴史の中で適切な位置を占めるに値します」 (Lewicki 1834: IX)。
- 7 O. パヴロヴシキーの『小ロシア語文法書』(Павловский 1818) が Y. レヴィツキーの『ハリチナーにおけるルテニア語または小ロシア語の文法書』で示されてある (Lewicki 1834: XIX - XX)。
 - 8 『ハリチナーにおけるルテニア語または小ロシア語の文法書』の目標は次の通りである：“dem gelehrten slavischen Publikum ein ausführliches Gemälde der russinischen (ruthenischen) Mundart zu geben” 「ルーシ (ルテニア) 方言の詳細な説明をスラヴ語学習者に教えること」 (Lewicki 1834: XXI)。
 - 9 以下は形容詞の予期される形式である。教会スラヴ語の形容詞の格変化のパターンは様々な教会スラヴ語の教科書に掲載している。例えば、Изотов 2007: 46。
 - 10 なかんずく、J. コピタルが Y. レヴィツキーに与えた助言は、オシップ・マコヴェイ (Осип Маковей) によって公表された (Маковей 1903b: 59-96)。
 - 11 というのは、教会スラヴ語とウクライナ語である。
 - 12 V. カラジチは J. コピタルの助言に基づいてセルビア語の改革を実行した (Милошевич 2015: 73-74)。

参考文献

- Danylenko, Andrii 2021. “Gente Rutheni, Nazione Poloni.” *Slavonic And Eastern European Review*.
- Kopitar, Jernej, Wilhelm, Heinrich 1808. *Grammatik der Slavischen Sprache in Krain, Kärnten und Steyermark*. Laibach.
- Lewicki, Joseph 1834. *Grammatik der Rutheinschen oder Kleinrussischen Sprache in Galizien* von Joseph Lewicki. (Mit einer Kupfertafel.) Przemysl [,] gedruckt in der griech. kath. bischöflichen Buchdruckerey.
- Łoziński, J. [oseph] 1846. *Grammatyka języka Ruskiego (Mało-ruskiego)*. Napisana przez ks. J. Łozińskiego. W Przemyślu.
- Mogilnicki, Jan 1837. *Rozprawa o języku ruskim*, przez Jana Mogilnickiego, kanonika kustosa kated. Przemysl. ob. gr. Radczy kons. I.T. D. Przekład z ruskiego przez L. A. Nabelaka. Czasop. nauk. księgozb. Osslińskich, rok 1829,

ヨシフ・レヴィツキー著『ハリチナーにおけるルテニア語または小ロシア語の文法書』(1834)におけるウクライナ語の主体性について(ダツェンコ) (35) 106

- sesz. III, str. 56 – 87. W Wiedniu w wydłoczni Karola Gerolda, 1837 (再出版).
- Moser, Michael 2016. *New Contributions to the History of the Ukrainian Language*. Canadian Institute of Ukrainian Studies Press. Edmonton-Toronto.
- Picchio, Riccardo 1984. "Guidelines for a Comparative Study of the Language Question among the Slavs". *Aspects of the Slavic Language Question. Volume I: Church Slavonic – South Slavic – West Slavic*. Edited by Riccardo Picchio and Harvey Goldblatt, assisted by Susanne Fusso. Yale Russian and East European Publications, 1–42.
- Unbegaun, Boris 1935. *Les débuts de la langue littéraire chez les Serbes*. Paris.
- Wagilewicz, J. [an] 1845. *Grammatyka języka Małoruskiego w Galicji*. Ułożona przez J. Wagilewicza. Lwów.
- Бернштейн, Самуил (ред.) 1978. *Национальное возрождение и формирование славянских литературных языков*. Москва: Наука.
- Витвицький, В. et al. 1976. Театр. *Encyclopedia of Ukraine in 2 Volumes*. Responsible Editor Prof. Volodymyr Kubijovyč. Paris – New York.
- Возняк, Михайло 1909. Студії над галицько-українськими граматиками ХІХ в. *Записки Наукового товариства імени Шевченка*. Т. 89. Львів.
- Добриловський, Юліан [1792]. *Науки парохіалнія на неділи и свята урочистія цілого року: з Евангелій подług обряду греческаго росположенных, з приданієм при конци науки при шлюбi, двох наук при погребеніи, и на Пятки святаго Великаго поста, о Страстех Христовых*. [Pochayiv, Drukarnia Uspens'koho monastyrua].
- Дуличенко, Александр 2014. *Введение в славянскую филологию. 2-е изд. стер.* Москва: Флинта.
- Иванов, В. [алерий] 1979. Палатализация. *Русский язык. Энциклопедия*, глав. ред. Филин, Ф. Москва: Советская энциклопедия.
- Изотов, Андрей 2007. *Старославянский и церковнославянский языки. Грамматика, упражнения, тексты*. Москва: Филоматис.
- Маковей, Осип 1903а. З історії нашої фільольогії. *Записки Наукового товариства імени Шевченка*. Т. 51.
- Маковей, Осип 1903б. Три галицькі граматики. Додатки. *Записки Наукового товариства імени Шевченка*. Т. 54.
- Масенко, Лариса (ред.) 2005. *Українська мова у ХХ сторіччі: історія*

лінгвоциду. Документи і матеріали. Київ. Видавничий дім «Києво-Могиллянська академія».

Милошевич Зоран et al. (2015). Реформа сербського языка Вука С. Караджича и ее политические последствия. *Вестник Череповецкого государственного университета*. №8 (69).

Мозер, Міхаель 2007. „Йосиф Левицький як борець за культуру «руської» (української) мови“. *Confraternitas. Ювілейний збірник на пошану Ярослава Ісаєвича*. Інститут українознавства ім. І. Крип'якевича.

Павловскій, Ал. 1818. *Грамматика малороссійскаго нарѣчія, или Грамматическое показаніе существеннѣйшихъ отличій, отдалившихъ Малороссійское нарѣчіе отъ чистаго Россійскаго языка, сопровождаемое разными по сему предмету замѣчаніями и сочиненіями*. В Санктпетербургѣ. Въ типографіи В. Плавильщикова.

Успенский, Борис 1994 *Краткий очерк истории русского литературного языка (XI – XIX вв.)*. Москва. Гнозис.

Франко, Іван 1896. «Слово о полку Игоревѣ» в перекладі Йосифа Левіцького. *Записки Наукового товариства імени Шевченка*. Т. 9. Львів.